
ルビコン川の英雄

こたつむり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルビコン川の英雄

【Nコード】

N1876G

【作者名】

こたつむり

【あらすじ】

有名な格言賽は投げられたをテーマにした作品です。元老院からの最後通牒を受け取ったカエサルが決断と思い。その川を渡る時最も愛された英雄は何を想ったのでしょうか。

眼前には川がある。

渡ろうと思えば、簡単に渡れるような川が。

しかし、その川が万の軍勢を足止めしていた。

この川に流れるただの水に足を踏み入れるということには、それだけ大きな意味があるのだ。

だが、カエサルは心は決まっていた。

だから、一片の迷いもなく言葉を紡ぐことができる。

「私はこれからこの川を渡り、ローマへと攻め入る」
カエサルは一拍置いて、一同を見回す。

そして、続ける。

「私は、今の元老院のやり方を認めることはできない。くだらない権力闘争に明け暮れ、財を貪り、功ある者を退け、おもねる者を取り立てる。民は今、疲弊しきっている」

沈黙が辺りを包む。

皆カエサルの言葉に聴き入っているのだ。

「私は元老院の専横を、これ以上許すことはできない。このような者たちを退け、民に安息を取り戻し、真のローマを取り戻すことこそが、私の野望だ」ただのきれいなことに聞こえるような言葉だが、

カエサルの言葉には、それを信じさせる確かな力が、強い力があつた。

だからこそ、普段ならこんな言葉など鼻で笑って全く聞こうとしない荒くれ者たちも、静かに聴き入っているのだ。

そして、彼ならできる、きっと成し遂げる、そう信じさせる何か、そこには確かにあつた。

「私がこれからこの川を渡るのは、ローマ市民の為でも、ましてやお前たちの為でもない。ただ、ただ私自身の野望の為だ。それでも、私についてくる気はあるか」

カエサルの問いに、歓声が答える。

ルビコン川に足が踏み入れられる。

もう後戻りはできない。

するつもりもない。

そう、賽は投げられたのだ。

軍勢は一気にルビコン川を渡り、一路ローマへと向かう。

誰よりも強く輝く男に導かれて。

(後書き)

ども、こたつむりです。拙い文章で申し訳なく思います。最も愛された英雄がその時何を想ったか、をテーマに書かせていただきた。何か感じていただけたでしょうか？感じていただけたなら、幸いです。まだ書くつもりがあるので、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1876g/>

ルビコン川の英雄

2010年10月10日04時22分発行